

# 中国モンゴル族地域における蒙漢双語教育<sup>1</sup>の研究 —モンゴルジン<sup>2</sup>モンゴル族教育の歴史沿革を中心に—

## A research on the bilingual education for Mongolian and Mandarin Language in the Chinese Mongolian Area —Focusing on the History of MongolJin Mongolian Education—

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

楊 陽

YANG YANG

### はじめに

#### I. 問題の所在

#### II. モンゴルジンモンゴル族教育の歴史沿革

1. 清朝の時期（1637年～1908年頃）
2. 中華民国の初期（1911年～1930年頃）
3. 中華民国の中後期（1931年～1949年9月）
4. 建国から文化大革命までの時期（1949年10月～1976年）
5. 改革開放以来の時期（1978年～現在）

#### III. まとめと今後の課題

---

<sup>1</sup> 蒙漢双語教育とは、モンゴル族の学生にモンゴル語（母語）と漢語（標準語）について両方同時に教える教育モデルを指す。さらに、学校でモンゴル族の学生にモンゴル語と漢語を用いて授業を行うことを指す。

<sup>2</sup> モンゴルジン・Mongoljin（モンゴル語の発音、部落名と地名）とは、現在の中国・遼寧省の西北部に位置している「阜新・モンゴル族自治県」（略称：阜蒙県、俗称：蒙古貞）を指しており、モンゴル語の1方言を話すモンゴル系の1グループが住んでいる。モンゴルジン地域の総面積は6246.2平方キロメートルであり、県内において、モンゴル族、漢族、満州族、朝鮮族、シボ族、リー族、ダフル族、チワン族、エヴェンキ族など21の民族が共に居住している。モンゴルジンの総人口73.61万人、35の郷鎮、382の行政村、8つの地域社会委員会がある。

## はじめに

中国は、多民族・多文化・多言語・多文字の統一国家であり、約100種以上の言語と30種以上の文字を持っており、55の少数民族（漢族を含めて56の民族がある）が公認され、漢族以外の民族はすべて「少数民族」と呼ばれている。言語は、漢語（中国語）と少数民族言語（略称：民族語文）に分けられ、言語の種類が多いだけでなく特徴も複雑である<sup>3</sup>。

そして、現行の「中華人民共和國憲法」（1982年施行、2004年修正）は、「序言」で同国が多民族国家であることを謳い、第四条では、各民族の一律平等、民族自治区の制定や各民族語・文字の使用と発展の自由などを定めている<sup>4</sup>。

しかし、中国少数民族の大部分は、辺鄙で遠い東北と西部に集中しており、各民族の教育現状が複雑となり、特に双語教育がまだ十分に行われていない状況となっている。さらに、少数民族の内部には双語教育政策に対してのほぼ異なる2つの意見が存在している。

第一に、双語教育政策を認める側の意見として、彼らは、少数民族地域に双語教育政策を実施したほうが良いと思い、漢語ができれば他の民族、特に漢族の人と交流や、相互理解ができると考えている。

一方、双語教育政策を認めない側の意見は、少数民族地域に双語教育政策を実施しなくても良いと思い、少数民族は自民族の言語・文字・文化を持っているのに、漢語を導入すれば、少数民族の言語・文字・文化に悪影響を与え、少数民族の文化が同化される可能性が高いと考えているのである。まさに、少数民族の人々の中にはこのように様々な考え方があり、漢族と少数民族との争いが絶えないことも課題になっている。

## I. 問題の所在

中国では、内モンゴル自治区を皮切りに、甘粛省・肅北モンゴル族自治県、新疆・バヤンゴルモンゴル族自治州、新疆・ボルタラモンゴル族自治州、新疆・ホボクサイルモンゴル族自治県、青海省・海西モンゴル族チベット族自治州と河南モンゴル族自治県、吉林省・前ゴルロスモンゴル族自治県、黒竜江省・ドゥルベツトモンゴル族自治県、遼寧省・ハラチン左翼モンゴル族自治県、遼寧省・阜新モンゴル族自治県、河北省・圍場満州族モンゴル族自治県など<sup>5</sup>のモンゴル族の集居区において、蒙漢双語教育が実施されてきた。

しかしながら、現在のモンゴルジンモンゴル族地域において、中国の改革開放政策と市場経済に基づいた諸政策の推進、さらに、都市化過程の促進に伴い、雑居区であるモンゴルジン地域は、次第に蒙漢文化併存、蒙漢双語を用いて話ようになっており、特にモンゴル族の人たちはモンゴル語で会話

<sup>3</sup> 戴庆厦「主編」『中国少数民族语言使用现状及其演变研究』民族出版社2009年p1

<sup>4</sup> 『中華人民共和國憲法』全国人民代表大会常務委員會公報2004年12月30日

<sup>5</sup> 丹珠昂奔「主編」・萨仁图雅「著」『走进中国少数民族系列丛书・蒙古族』辽宁民族出版社2012年p202

をする際に、モンゴル語の中に漢語を入れて話すことがかなり行われている<sup>6</sup>。

近年のモンゴルジンにおいて、モンゴル民族の希望であるモンゴル族の子どもたちは、就学前の段階から幼児の言語(第一言語)教育において当該民族の民族言語を用いるか、標準語(漢語)を用いるかという選択を迫られている。また、モンゴルジン地域の幼稚園(モンゴル族の幼稚園を含む)と学校教育で用いられる少数民族の言語や標準語は、学校によって異なっている<sup>7</sup>。これらの問題は言語教育において葛藤や不満などを生じており、最も大きな民族問題と社会問題となっている。

本研究は、雑居区のモンゴル族地域であるモンゴルジンにおける民族教育の歴史沿革を整理・分析し、そしてモンゴル語の発展を妨げている原因を探究しながら、さらに、各歴史時期における民族教育の実施方法を参照して、現在の蒙漢双語教育に存在している問題点や改善策を明らかにすることを目的とする。

## II. モンゴルジンモンゴル族教育の歴史沿革

モンゴルジンはモンゴル系の悠久な歴史と文化を持ち、古代と近代でモンゴル族の大発展に重要な貢献をしている部落である。ほぼ紀元前 7600 年前のモンゴルジン地域では、世界で有名な「チャハアル文化」の発生の地として周知してきたが、古代から近代までのモンゴルジン地域において、東胡、烏桓、鮮卑、契丹、女真、モンゴルなどの遊牧民族の興亡があった。

紀元 7 世紀以後、モンゴルジン地域は契丹人の居住区になって、「契丹故郷」と言われていた。また、長い教育史を持っているモンゴルジン部落は、契丹政権とモンゴル政権の時期から、モンゴル族の民族教育を発展させてきた。遼王朝の時期、官庁から契丹文字を創造しながら州学と府学を開設し、これらの影響を受けた民衆たちは、私塾を開設し、儒教の教典を学んでいた<sup>8</sup>。

元朝に至り、モンゴル帝国の創始者チンギス・ハーン<sup>9</sup>の孫であるフビライ・ハーン<sup>10</sup>は、新モンゴル文字「パスパ文字」を作るため、チベットのラマ僧パスパ(1239~1280, チベット仏教サキャ派の

<sup>6</sup> 上記の内容はインタビュー調査の結果から抽選したものである。

<sup>7</sup> 高慧・苏德「城市少数民族幼儿语言发展的困惑和选择—以对呼和浩特市蒙古族家长们的调查访谈为例」『内蒙古师范大学・前言期刊杂志』2007年

<sup>8</sup> 暴风雨・项福生「主编」『蒙古贞历史』辽宁民族出版社 2008年8月 p124 第7章

常德福・陶志「主编」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育简史』辽宁民族出版社 2007年1月 p2 概述

<sup>9</sup> チンギス・ハーン(1162年5月31日生まれ、1227年8月25日死去)本名ボルジギン・テムジン、モンゴル帝国の初代ハーン(皇帝と同意)である。チンギス・ハーンの一生涯は大小様々な集団に分かれてお互いに抗争していたモンゴルの遊牧民諸部族を一代で統一し、中国北部・中央アジア・イラン・東ヨーロッパなどを次々に征服し、最終的には当時の世界人口の半数以上を統治するに到る人類史上最大規模の世界帝国であるモンゴル帝国の基盤を築き上げ、現在のモンゴル国において国家創建の英雄として称えられている。

<sup>10</sup> フビライ・ハーン(1215年9月23日~1294年2月18日)本名ボルジギン・フビライ、モンゴル帝国の第5代ハーン(皇帝と同意)であり、大元ウルスを創建した。これに対してクビライは、はじめて国号を「大元」と定め、帝国の中心をカラコルムから中国の大都に移動させるなど様々な改革を打ち出した。クビライの代以降、カアンの直接支配領域はモンゴル帝国のうち中国を中心に東アジアを支配する大元ウルス(大元大蒙古国)に変貌した。

法王)を元朝のウルスインバガシ(日本語の皇帝の教師と同意)として招聘してきた<sup>11</sup>。

この時期、元朝の將軍鉄木耳は遼陽行省のムジンダルガ(日本語の省長と同意)に就任し、省都を三回目懿州(現在阜新モンゴル族自治県塔營子郷)に移都し、この地域は東北全境の政治、軍事、経済、文化の中心地として有名になった。

鉄木耳は、ムジンダルガを退職した後、元皇慶元年(1312)、王伯勝が遼陽行省のムジンダルガの後任となり、書館を作り上げた上で民族教育を繁栄させる事業を多く実行した。かつて、元至順3年(1332)に建立された「懿州城南学田碑」と新民鎮排山楼村の入り口に置いてある「大玄真宮祖碑」の記載によれば、当時のモンゴルジン地域のモンゴル族教育が発展した。これは元朝の時代、モンゴルジン地域の民族教育が十分発展してきたことの証拠であると言える<sup>12</sup>。

## 1. 清朝の時期(1637年～1908年頃)

清朝時代のモンゴルジンモンゴル族地域に関わる民族教育の歴史を遡れば、1637年に、モンゴルジン地域でトゥメッド左翼旗(日本語の地方政府と同意)が開設(同時に中・右翼旗を設置した)された。

この時期のモンゴルジン地域は、反乱がほぼ鎮まり、社会環境が安定してきた。しかしながら、チベットの仏教がモンゴルジン地域に伝来し、仏教文官を主とする寺院教育モデルが開設され、ラマ僧を中心に一般の民衆は寺院に行ってモンゴル語、チベット語、珠算などの知識を学ぶようになった<sup>13</sup>。

1908年、モンゴルジン地域のモンゴル族貴族と官吏の子供を育成するため、トゥメッド左翼旗王府の中に、新学堂と官倉書館を作り上げた<sup>14</sup>。この時期、モンゴルジン地域で寺院教育モデルを中心に、アラバンソラガンフムジェ教育(日本語の官立教育と同意)とアラダインソラガンフムジェ教育(日本語の私立教育と同意)などの教育モデルが示され、主にモンゴル語を学ぶことになった。さらに、ある寺院では、モンゴル医学麻醉薬学、天文地理学と絵画彫刻学などの学科が開設され、万を数えるほどのモンゴル語の各学科を精通する専門人材を育成した。

清朝の時代には、満清政権を強化するためモンゴル族に対しては懐柔と愚民化政策を実施した。さらに、満州政権を強固するために、清朝からモンゴル族上層部の指導者に王爵と侯爵の称号を与えた。これらの称号はモンゴル族の人民を統治する満州政権の道具になってきた。

しかしながら、清朝の愚民化政策はこれだけではなく、教育の方面からモンゴル族の人民を愚弄する最悪の状況へと変化していった。その上で、首都北京で「八旗」という教育機関を作り上げ、モン

<sup>11</sup> チンギス・ハンの時代はオイグルジンモンゴル文字を使った

<sup>12</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月p124第7章

項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月p57-62

<sup>13</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月p14

暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月p124第7章

<sup>14</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月p124第7章

ゴル族の王侯貴族の子弟たちを入学させ、モンゴルジン地域にラマ教の勉強を強制的にさせた<sup>15</sup>。この時期までは、清朝の愚民化政策が順調に進んでいた。

清朝崇徳（愛新覚羅・皇太極の年号、1637年に後金を清に改名）2年（1637）において、トゥメッド左翼旗（旗は1つの行政単位）の開設を機に、サンバノエン（善巴：1601～1657、ノエン：モンゴルの官僚専用名）はモンゴルジン全域のザサク（モンゴル語、意味：旗長と同意、漢語：札薩克）に就任した。

しかし、当時のトゥメッド左翼旗での民族構成が複雑な状況になっており、旗内でのモンゴル族部落はモンゴルジン部（蒙古貞部）だけではなく、ウリヤンハア部（兀良哈部）とチャハアリ部（察哈爾部）の三つのモンゴル部落が組み合わさっていた。さらに、三つのモンゴル部落の民衆たちは、シャーマニズムとチベットから伝来した仏教を信奉することになった<sup>16</sup>。

清朝康熙（愛新覚羅・玄燁の年号）8年（1669）には、満清政府は宗教を利用してモンゴルジンのモンゴル族を統治するため、土木業を大々的に発展させる政策を実施し、無数の寺院を建設した。この時期は、寺院教育モデルを主とした様々な教育モデルができ、最も繁栄していた時期で1.5万人程のラマ僧がおり、東北最大の仏教聖地である「瑞應寺」だけでも3000人程のラマ僧が授業を受けていた事実が認められる<sup>17</sup>。

#### （1）寺院教育モデル

清朝の時期、モンゴルジン地域では、寺院教育モデルはモンゴル民族教育の中心として発展し、ラマ僧たちは、当時、有名な瑞應寺、普安寺、徳恵寺、広寧寺、八大王寺などの寺院でモンゴル語、チベット語と満州語を学んでいた。さらに、各地域の寺院にいるラマ僧は多くの知識を持ち、寺院に子弟を招聘しながらモンゴル語と珠算を教えていた。当時の寺院は、モンゴル族青少年たちがモンゴル語を学べる重要な場所として人気があった<sup>18</sup>。

当時の寺院教育の代表である瑞應寺は、宗教の聖地と総合大学として名をはせ、モンゴル語の授業を主体とする珠算などの専門知識を教えていた。さらに、瑞應寺の中にサニトザサン（哲学部）を中心に、デインケイザサン（天文地理学部、1823年開設）、モエインバアザサン（門巴医学学部、1702年開設<sup>19</sup>）、アケバザサン（密宗学部）、デイダンチェランザサン（延寿学部）、ビチゲンゲイリ（文書庫）とホグラインザサン（後方支援部）などのザサンが七つ設けられた。とりわけ、デインケイザサ

<sup>15</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社 2007年1月 p14

<sup>16</sup> 同上 p14

<sup>17</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社 2007年1月 p14

暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞历史』辽宁民族出版社 2008年8月 p125

<sup>18</sup> 同上

<sup>19</sup> 1702年、瑞應寺の第一世の生き仏であるサンダンサンプの提案で、モエインバアザサン（門巴）が開設され、モンゴル医学に関わる学問的な研究をする重要な学術機関となった

ン(天文地理学部)、モエインバアザサン(医学部)とビチゲンゲイリ(文書庫)から、数多くのモンゴル医学、天文地理学とモンゴル語に関わる専門の人材が輩出された<sup>20</sup>。

しかしながら、現在のモンゴルジン地域のモンゴル医学と麻酔学は、多数の医学者の努力により、この300年の間に、宗教の思想と理論から抜け出し、独自のモンゴルジン医学麻酔学としての地位を確立した。加えて、この学部から「四部医学」、「増方四部演経」、「密封療法」、「処方箋」などのモンゴル医学麻酔学の経典や著作が再編集、翻訳された<sup>21</sup>。

## (2) 官設教育モデル

清朝光緒皇帝(愛新覚羅・載活の年号)29年(1903)、モンゴルジン地域での漢族を管理するため、「阜新県」が開設され、もともとトゥメッド左翼旗はモンゴル族の民衆たちの事務を管理することになった<sup>22</sup>。

しかしながら、光緒皇帝の34年(1908)に、トゥメッド左翼旗のザサクは、満州政府からの「科挙を廃除して、学堂を発展させる」という思潮の影響を受け、理藩院<sup>23</sup>がトゥメッド左翼旗の王府に「維新学堂」を創設した。この学堂が設置されたことは、モンゴルジン地域のモンゴル民族教育がスタートしたことを象徴している<sup>24</sup>。

当時の学堂は「賢才を育成し、封建王朝に忠誠する」ことを宗旨として、また「すべての学堂は忠孝を主体に、経史子集<sup>25</sup>の内容」を学生に教えた。これ以外にも、学生は満州語、モンゴル語「アビヤ」とモンゴル語に訳した「三字経」、「千字文」、「大学」「中庸」、「孝経」「聖諭広訓」などの著作を学んでいた<sup>26</sup>。「維新学堂」が開設されたことは、モンゴルの言語文字の使用及び民族教育の発展のために重要な意義があった。

## (3) 官倉書館モデル

清朝の末期、満清政府は首都北京で「八旗官学」を開設し、この官学はモンゴルの王侯貴族の子弟だけではなく、農村での学校に通学している青年にも郷級学校の入試試験に参加させる教育政策を作り上げた。

しかし、トゥメッド左翼旗のモンゴル王侯貴族と官僚は不満があり、その対応策として、王府のビ

<sup>20</sup> 暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p125-127

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p15

<sup>21</sup> 暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p125

項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月 p324

<sup>22</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p15

<sup>23</sup> 清朝の時モンゴル、チベットと回族を管轄するために設置された中央行政機関を指す

<sup>24</sup> 暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p127

<sup>25</sup> 経史子集とは、経は経書、史は歴史、子は諸子、集は詩文集の四部著作を指す

<sup>26</sup> 同上 p127

チゲンゲイリ（文書庫）で教育制度 3～5 年、または 7～8 年間の「官倉書館」を設立し、王侯貴族の子弟を郷級の入試試験に対応できるようにした。つまり、モンゴル語と満州語を学ばせたわけである。

そこで、郷級の入試試験の合格者は、「科挙」入試試験に参加する資格を取得し、不合格者は官倉書館に残して文書（専用官僚名）として、王府の衙門で働いた。しかしながら、王府で働く間に総合成績が良ければ、ザラン（モンゴル官僚の専用名）と梅林（モンゴル官僚の専用名）に登用され、もし不合格でも、郷級の書館の教師になれた<sup>27</sup>。

#### （４）私塾教育モデル

清朝の末期、モンゴルジンのモンゴル族は文化と知識の大切さに関心を持ち、農村で自宅と村民連合運営の「私塾」教育が始まった。しかし、当時の「私塾」はお金がないため、募集した学生の保護者から「斗米と百柴」を提供して教師を招聘した。

そして、教師は、学生にモンゴル語を教えた。当時の「私塾館」では、学習時間が固定しておらず、学習内容もそれぞれの私塾館で一致しておらず、学年でも、それぞれ違った教育内容を教えていた<sup>28</sup>。

清朝政権の 200 年の間に、モンゴルジン地域のモンゴル族教育は、清朝の前期から末期まで一貫して、緩慢なスピードで発展していった。しかし、そこでは大きな課題が三つあった。

第一は、清朝廷にとって優遇政策となるような措置を、モンゴル民族に施したことである。モンゴルの民衆たちには、仏教を信じさせ、頭がいい子供は学堂に送られて教育を受けられるのではなく、寺院に送られてラマ僧にされた。

第二は、清朝廷が不公平な教育制度と雇用制度を実行したことである。モンゴル族の官僚に王侯の爵位を与え、モンゴル族を配下に置き、モンゴルの青年には、「科挙」入試試験が受験できないようにさせ、意欲を低下させたのである。

第三は、牧業経済を中心に行わせ、民族教育の発展が妨げられたことである。清王朝の時期のモンゴルジン地域は、遊牧を主とした牧業経済であり、民衆は多くの専門知識を持たなくても生活ができるようにし、モンゴル民族の教育事業の発展を妨害した。

## 2. 中華民国の初期（1911 年～1930 年頃）

中華民国初期のモンゴルジンは、「私塾」でモンゴル語を学ぶことを中心にしつつ、あわせて漢語の学習を行うことが求められた。モンゴル語教育が発展するために、「蒙漢双語兼通」の人材を育成することを目標にして、教育活動が行なわれた。

<sup>27</sup> 暴风雨・项福生「主編」『蒙古贞历史』辽宁民族出版社 2008 年 8 月 p15-16

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育简史』辽宁民族出版社 2007 年 1 月 p127

<sup>28</sup> 暴风雨・项福生「主編」『蒙古贞历史』辽宁民族出版社 2008 年 8 月 p15-16

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育简史』辽宁民族出版社 2007 年 1 月 p128

1911年の辛亥革命が勃発して以降、中華民国政府から「モンゴル盟旗の王公制度に関わる優待条例」という公文書が公布され、同公文書に「東トゥメッド左翼旗のザサク郡王、協理、梅林、ザラン」などの官僚制度は、現状のままであることを明確にした。

しかし、もともと世襲している領地、地方行政の管理方法及び王公貴族、寺院、ラマ僧、生き仏などの称号は一律存続し、民国政府の申告書のみ、すべて漢語を使用することを決定した<sup>29</sup>。

民国19年（1930）、蒙蔵院<sup>30</sup>から、「モンゴル会議に関わる決議文」が配布され、同決議文には「モンゴルの各旗で教育機関を開設することを制限し、義務教育を行う」と記された。この時期から、このようにして近代教育モデルが形成されていった。しかし、まだ授業方法が単一で、昔の封建教育モデルを主としていた<sup>31</sup>。

### （1）私塾教育モデル

民国初期のモンゴルジンは、外地から移住してきた漢族の人口増加に伴い、農業、手工業、商業は発展し、モンゴル族と漢民族の間の社会的交流が頻繁になった。こうした社会背景の影響を受けて、モンゴルの官僚も一般の民衆も教育の重要性を知り、「私塾」教育モデルが発展する時期を迎えた。

そこで、民国の初期から農村のモンゴル族村屯で、自宅と村民連合運営型のそれぞれのモデルから成る「私塾」が、70校ほど開設された。しかし、これらの私塾館の学習時間は、固定しておらず、学習内容も一致しておらず、学年でもそれぞれ違った教育の現状であった。

しかしながら、民国初期のモンゴル民族教育は十分に発展し、お金持ちの地主階級のモンゴル人も、数多くの「私塾」を開設した。その中でも、ジハイラチリチエガ（人名）は、泡子鎮の徳力格爾村で、1つの私塾を開設した。その後、彼の息子であるマハバスリイは、二万金（中華民国紙幣1912-1949）を使って、もう1つの私塾を開設した。加えて、同じ泡子鎮の大屯村で1つの私塾が開設され、デジトウが教師として、20年間にわたり、授業を教えた。「私塾」は、清王朝光緒皇帝の時代にも幾つか存在した。しかし、民国初期に至り、「私塾」は、次第に増えていった<sup>32</sup>。

### （2）官設教育モデル

中華民国が建国されて以降、モンゴル族とチベット族の民族事務を管理するため「蒙蔵院」という中央行政機関が開設された。民国元年（1912）、王府の中の新学堂は「トゥメッド左翼旗二級小学校」

<sup>29</sup> 暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p128

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p23

<sup>30</sup> 民国建立以降、モンゴル族とチベット族を管理するため、清王朝時代の理藩部を廃除し、蒙蔵院委員会という国家機関を開設した

<sup>31</sup> 同上

<sup>32</sup> 暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p130

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p23



に改名され、毎年 50～60 人ぐらいのモンゴル王公貴族と大富豪の子弟のみ募集することになった。

しかし、この学校の理事長 2 人のうち、梅林という職務にはスプテインゲイが、また、王爵という職務にはイウンダアンサンブが就任した。また、ウエンジャトウとゴウシニング、石懷珍などの人たちは、教師の職務に就いた。しかしながら、改名された「トゥメッド左翼旗二級小学校」は、さほど大きくない小学校ではあるが、生徒たちは、自然学と社会学に関わる豊富な基礎知識を学ぶことができた<sup>33</sup>。

### (3) 義学教育モデル

民国 4 年 (1915)、全国で義学教育モデルが大発展した。モンゴルジンで、トゥメッド左翼旗の行政と公安の大権を持っている伊紹先は、全旗義倉<sup>34</sup>の補助金を利用して、烟台宮子村で「義学教育」機関が開設された。

しかし、モンゴル族の人に対する優遇政策としては、「義学」の学生の学費が一律免除、宿舎に泊まる学生の食費はすべて学校から提供され、学校の日常運営費もすべて義倉から支給されることになった。ただ義学にいる期間は、一定ではなく、多くても 5 年、少なくとも 1～2 年であった。「義学」の初代理事長には、トゥメッド左翼旗の章京 (官僚専用名) であったスエイダンヌリブが任命された。しかしながら、当時で有名な瑞應寺の中にも「義学」が開設されたが、戦争のために閉設された<sup>35</sup>。

中華民国初期のモンゴルジン地域のモンゴル族教育には、三つの特徴がある。

第一は、「私塾」、「学堂」、「義学」三つの教育モデルが次第に増加し、王公貴族の子弟のみが授業を受けられるのではなく、一般の官吏や民衆の子弟もまた、授業を受けられる状況へと変化していった。

第二は、民国初期のモンゴル族の学生は、モンゴル語だけを学ぶのではなく、漢族の漢語と古代の漢文化を勉強することができた。

第三は、国内で軍閥の乱戦と封建勢力が政権を奪い合う問題が絶えないため、教育事業がすべて遅れ、学校の環境も悪くなり、教師の質も低くなってしまい、社会発展のニーズとまったく合わない現状になった。

## 3. 中華民国の中後期 (1931 年～1949 年 9 月)

1931 年 9 月 18 日の「九一八」事件が起こった後、東北三省が日本関東軍に占領され、民衆は災禍に巻き込まれた。1932 年、日本帝国主義は、民国初期で廃除された清王朝最後の皇帝である溥儀を擁

<sup>33</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞历史』辽宁民族出版社 2008 年 8 月 p128

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育简史』辽宁民族出版社 2007 年 1 月 p24

<sup>34</sup> 義倉とは、学校運営委員会のメンバーから人を集めて、食糧を寄贈してもらい、また、お金も融資してもらい、その利息で義学教育の運営を行う機関を指す

<sup>35</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞历史』辽宁民族出版社 2008 年 8 月 p129

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育简史』辽宁民族出版社 2007 年 1 月 p24

立して、「偽満州国」という傀儡政権を打ち建てた。

「偽満州政府」は東北三省の政治と経済を支配しながら、文化教育の面で「奴隸化」教育政策を実施し、さらに、日本帝国主義は、モンゴル地域民族教育に手を入れた。そして、中華民国の教育制度を一律廃除し、強制的に「大東亜共栄圏」、「日本満州一徳一心」などの講義を開設し、「忠誠心が厚く善良の国民」を育成するための奴隸化教育制度を実行した。また、奴隸化教育を強化するため、「私塾」は一律、公立小学校に改名され、国民高等学校を開設し、強制的な形式で学生に日本語を学ばせた。

1934年9月、東北三省の学校で「偽満州政府」から新たに編纂された教科書が使用されることになった。もともとの教科書を廃除し、国家と民族意識に関わる内容をすべて削除し、さらに、「日本満州一徳一心」と「天照大神」などの内容を書き入れ、小学校教材の「修身」と「中学国民道徳」などの内容を日本の「建国精神」に改め、日本帝国主義の象徴である「乃木希典将軍<sup>36</sup>」を崇拜させる状況が生まれた<sup>37</sup>。

#### (1) 小学校教育モデル

この時期の教育は、「偽満州」政府の教育宗旨（教育綱要）によって、モンゴル全域での小学校を下級小学校と上級小学校に分けた。そのうち、下級小学校の中には国民学舎と国民学校が含まれていた。

1938年に設立された小学校は40校あり、この中には、旗立国民優級学校1校、村立国民学校2校、村立国民学舎34校、村立国民義塾3校があることが確認できる。さらに、モンゴルモンゴル族の集居区である聖地オインアグラアイラ<sup>38</sup>で、「大巴国民優級学校」が開設され、?某、王保民、白過陽は校長を歴任した。開設された学校の学年は、全部で2学年で、上級クラス2クラスと下級クラス4つあり、学生数は270人であった。

1941年以降、モンゴル地域の各地域で、「蒙漢連合運営」の優級学校は、泡子、務歆池、ハラハ、庄家店、排山楼、東梁、官営子、元宝窪などの地域で設立された<sup>39</sup>。

---

<sup>36</sup> 乃木希典は、日本の武士（長府藩士）、軍人、教育者。日露戦争における旅順攻囲戦の指揮や、明治天皇の後に慕って殉死したことで国際的にも著名である。階級は陸軍大将。栄典は贈正二位勲一等功一級伯爵。第10代学習院院長に任じられ、迪宮裕仁親王（昭和天皇）の教育係も務めた。

<sup>37</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p131

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p34

<sup>38</sup> オインアグラアイラ（地名のモンゴル語の発音）は、現在の大巴鎮にある観光地を指し、中国語で翁山村と呼ぶ

<sup>39</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p131

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p34—38

(2) 中学校教育モデル

興亜学校は、「偽満州」傀儡政権が樹立された初期に成立した。学年は1～2年となり、毎年30～40名の学生を募集し、学習内容は大工、左官技術を主として、日本語とモンゴル語を学ぶことであった。しかし、興亜学校は三期生だけ募集して、廃校となった。

ラマ僧学校は、モンゴル全境での各寺院にいる若いラマ僧（年齢は一定ではない）を対象として、定員を超えて募集活動をした。しかし、ラマ僧学校は、表面的には、仏教の教典に関わる研究をしている場所であったが、実は、偽満州政府の奴隷化教育の目的を実現するため、強制的な形式でラマ僧に日本語を学ばせる場所であった。しかし、多くのラマ僧は、日本語の勉強を望まなかったため、募集活動がなかなか順調に行かなかった。そこで、しばらくして、ラマ僧学校はなくなった。

錦州省立東トゥメッド左翼旗国民高等学校（1941～1945）は、農業科の知識を教えることを目的とする中等学校であった。しかし、学生の募集範囲は、モンゴル全境の優級学校からの卒業生だけでなく、北票、朝陽、彰武などの地域の学生からも募集することになった。

この間に、200人程度の小学校からの卒業生は、札蘭屯師範学校、錦州師道学院、吉林師道学院などの師道学校に進学した。他の卒業生は、王爺廟興安学院、海拉爾開魯国民高等学校、朝陽などの国民高等学校に進学した。

上記の学校からの卒業生は、国内の長春建国大学、長春法制大学、ハルビン北満医学大学に進学し、何洪章、海宗祥、包福全、海宝珍、岳徳本、云丹桑布などの学生は、日本の早稲田大学などの高等教育機関に進学した<sup>40</sup>。

中華民国中後期の共産党では、少数民族に対する民族教育政策が実施されていた。しかし、1945年8月15日、日本帝国主義が無条件に降伏して以降、解放戦争時期に入ると、共産党と国民党の争いが全面化した。国民党軍の統治区（略称：国統区と呼ぶ）で行われたモンゴル民族の教育は以下のような状況であった。

1945年12月30日、モンゴル全境は国民党軍に占領され、県内及び鉄道の沿線地はすべて国民党軍の統治区になった。例外として、モンゴル全境北部の農村は、共産党の根拠地として国民党軍に占領されなかった。国民党の熱河省教育庁は、国統区に「小学校の回復及び再建」という教育政策を実行した。

1946年7月15日、国民党中央政府は国統区のすべての市と県政府を合併し、県政府を樹立した。8月には、モンゴル全境の休校状態であった学校の運営が次第に再開され、10月には、モンゴル全境の海州で県立の中学校が1校が開校した。

この時期には、国民政府が国統区の学校に「中華民国の教育宗旨」を実施し、封建的なファシズム教育を普及させ、学生たちに国民党の党義教育を大々的に宣伝し、授業の内容についても文化的なも

<sup>40</sup> 暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞史』辽宁民族出版社2008年8月 p131-135

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p38-42

のから軍事的なものに変えさせた。

さらに、国民政府は、反共産党の教育を広めていた。しかし、学校の教師と学生たちは次第に反感を抱くようになり、校内において「反飢餓、反迫害、反内戦」の闘争事件が起きた。とりわけ、国民党の行政機関と警察が教師と学生の騒動を鎮圧する事件が絶え間なく発生し、教師と学生は次第に退職、退学し、学生を停学処分としなければならない状況になった。

モンゴルジン北部の農村での状況は国統区と大きく異なっており、中国共産党の指導で「旗・県立の連合政府」が樹立され、バトウが教育課長に就任した。中国共産党は、戦争中でも教育を重視したが、学生のための校舎がないため、民衆は自発的に家を提供し、専門の教師を招聘して授業が行われていった。

土地革命の時期には、規模の異なる学校を多く設置した一方で、学校の予算が足りないため、連合政府は田畑を分けて、学校に分配した。この学生たちは田畑を耕し、学校の運営を維持してきた。また、学校を管理するため、小学校を幾つかの学区に分け、各学区の中に中心小学校或は完全中心小学校を設置した。教育の戦線を統一するため「民主的、民衆的、科学的」という新民主主義教育の旗を高く上げ、この時期の学校教育は大発展し、ある地域では幼稚園が始まった。

1948年、モンゴルジンは解放された。ここから、モンゴル民族教育が新しい夜明けを迎えた。1949年4月、モンゴルジンは遼西省教育会議の精神を貫徹するため、県内で初めての教育工作大会を行った。同会議において、小学校を中心に整理し、各学校を新たな正規学校に変えることを決めた。

上記の資料は、中華民国中後期、特に解放戦争時期の教育の特徴を明確に示している。この時期、民衆は自発的に学校を作っていた。また、その学校の教育は社会での活動と密接な関係であり、学生を子供団体にも所属させ、教師と共に土地改革を宣伝することになった。一方、成人の教育は、夜間学校、冬学校と字が読める速成クラスなどの教育モデルが実施され、このうち最も人気があったのは農民夜間学校であった<sup>41</sup>。

#### 4. 建国から文化大革命までの時期（1949年10月～1976年）

1949年10月1日、新中国が成立されて以降、中国共産党と中央政府は、少数民族の民族教育の発展に強い関心を持って来た。建国初期のモンゴルジンは、モンゴル民族の教育が迅速的に発展した。さらに、1957年以降、特に「文化大革命」（1966年5月～1976年10月）が起きた10年の間に、モンゴルジンは、「左」の思潮による影響が深刻となり、モンゴル族の民族教育が遅れた。

<sup>41</sup> 国統区時期の教育は三つの本を参考の上でまとめた。

暴风雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p131-137

常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年1月 p34-45

項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月 p275-282

### (1) 小学校教育モデル

1951年、最初に開催された全国少数民族教育工作大会において、「少数民族の教育工作を強化させる教育提案」が承認されるとともに、これからの少数民族教育への指導方針、任務、授業用語及び予算などの基本問題が明確にされた。同大会は、全国少数民族教育実施に関する重要な取り組みの一貫としてみなされている。また、すべての授業をモンゴル語で行うことが承諾された。

1952年はモンゴルジンのモンゴル族に対して、モンゴル族の教育現状に大きな変化があった。遼西省教育庁によって、「秋学期に入学させたモンゴル族小学校及びモンゴルクラスの学生は、一年生からすべての科目はモンゴル語で授業を行い、以降の中学生入学試験に受験する学生のモンゴル語レベルを検定することが決まった。すべてのモンゴル族小学校で必ず「蒙漢双語」に書かれた看板を掛けること」が定められた。しかし、すべての科目をモンゴル語で教えるための準備が早急に行われ過ぎたため、多数の学校が実施できなかった。

そこで、この問題の対応策として、県政府は遼西省教育庁からの指示を再度表明し、さらに、1953年に、県政府はモンゴル族教育の実態状況に合わせて二つの提案を行った。

第一に、あるモンゴル族小学校及びモンゴルクラスの授業をモンゴルで行い、三年生から漢語の授業を追加すること。

第二に、その後、すべて授業を漢語で行い、そこにモンゴル語の授業が追加されることが決まった。

しかしながら 1954年、中央政府は「整頓、強固、向上、着実な歩調で前へ進む」という教育方針を作り上げた。遼西省教育庁は中央政府の教育方針を実行するため、モンゴルジンのモンゴル族小学校を対象として、「適格的な仕方では民族教育を発展し質を向上させる」という教育提案を示した。その結果、モンゴル族の小学校 18校が存続されることとなった。

1966年には、「文化大革命」が発動され、全国の人民はいわれのない政治活動に巻き込まれた。この時、多数のモンゴル族学校の指導者は、「反革命分子」或は「修正主義分子」として批判された。特に多数の少数民族の教師は、「民族分裂主義分子」として批判されて、無数の冤罪事件が起こった。「四人組」が全国の少数民族の言語文字を根絶する教育政策を実施し、その結果モンゴルジン地域のすべてのモンゴル族小学校を一律廃校とし改名した。さらに、モンゴル語の授業とモンゴル語教材の出版事業の停止により、モンゴル語の教師は全員転職した<sup>42</sup>。

### (2) 中学校教育モデル

解放初期のモンゴルジンは、モンゴル族中学校がなかったため、モンゴル族の学生は、徒歩で近くにある漢民族の中学校とウランハダ（赤峰）のモンゴル族中学校に通学していた。この当時、ウラン

<sup>42</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社 2007年 p48-51. 54-66  
項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社 1991年 6月 p275-292

ハダのモンゴル族中学校に通学していた学生は、卒業後、内モンゴル自治学院（この後、赤峰モンゴル族中学校に改名した）に進学した。

1951年に入ると、モンゴル語教育が発展し始まった。県内の初級中学校に初中レベルのモンゴルクラスと初級レベルの師範クラスが開設され、さらに、1952年には、県内で「遼西省モンゴル人民初級中学校」が設立された。1953年、この学校の所在地は変更され、阜新市内に移動し、学校の名称は「阜新市モンゴル中学校」に改名された。この中学校は完全中学校となり、校内では師範クラスが開設されていた。

1966年には「文化大革命」が、モンゴル族の教育に多大な悪影響を及ぼした。モンゴル族学校の指導者は全員打ちのめされ、教師たちは「反革命分子」として批判され、校内で「造反派」という組織が作り出された。そこで、モンゴル族の民族教育は、歴史上で前例のない由々しい蹂躪を受けた。

1973年に入ると、中央政府は国内の少数民族地域にある学校を整理するため、阜新県革命委員会が県立のモンゴル中学校を回復させ、さらに、学校の名称を「県立のモンゴル中学校」に改名した<sup>43</sup>。

### （3）モンゴル医学クラス教育モデル

モンゴル医学は、モンゴル族の貴重な文化遺産である。解放時期のモンゴルジンモンゴル医学は大発展し、1954年には仏寺（地域名）で「モンゴル医学クラス」教育機関が開設され、同年に9人の学生の募集があった。1956年に、以前の「モンゴル医学クラス」を「モンゴル医学学校」に改名し、同年に26人の学生の募集があった。1959年はモンゴルジン人民病院（県立）の衛生支部を仏寺のモンゴル医学クラスと合併し、「県立の衛生学校」が設置され、同年に32人の学生の募集があった。しかし、様々な影響により衛生学校は1962年に撤廃された。同年にモンゴルジン人民病院にモンゴル医学クラスが設置され、20人の学生の募集があった。1973～1974年の1年間には、阜新市の衛生学校にモンゴル医学専攻が開設され、同年には20人の学生の募集があった<sup>44</sup>。

### （4）農民教育モデル

1949年に、抗日戦争と国内内戦が全面的に停戦し、新中国が成立した。共産党が少数民族の教育を重視するようになり、特に農民階級の非識字の成人に関しては、中央政府が最重要視する教育を行った。さらに、非識字状況を改善するため、1952年に中央政府が県人民代表委員会の文教科に3名の非識字教師を配備した。加えて、1953年から都市部と農村部に行政機関で働いているメンバーに非識字状況を一掃する活動を実施し、同年、成人に対してモンゴル語の速成クラスを10校開設した。

<sup>43</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年 p51-53.54-66

項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月 p275-282

<sup>44</sup> 項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月 p295-303

暴風雨・項福生「主編」『蒙古貞歴史』辽宁民族出版社2008年8月 p138-158

1956年、モンゴル語の速成クラスは、以前の78校から120校に増え、学生6650人（行政機関の166人を含む）になった。そこで、この時期のモンゴル語は、全民がモンゴル語を学ぶという大きな波が起こり、モンゴル語教育は大発展した<sup>45</sup>。

上記の資料は、建国から文化大革命までの時期、特にモンゴル民族教育の三つ特徴を明確に示している。

第一に、建国前後のモンゴル語の教育は大きく変化し、特に建国以降、共産党が民族教育を重視することになり、モンゴル語教育を発展させる時期が訪れたことである。

第二に、1949～1965年の間に、モンゴル語教育と学校が次第に回復し、モンゴル語の民族教育は新たな夜明けを迎えるようになり、全民モンゴル語を学ぶ時代になったことである。

第三に、文化大革命（1966～1976）の時期のモンゴル語は、「四人組」の民族教育政策が原因で、モンゴル語教育と学校はすべて撤廃されたことである。

## 5. 改革開放以来の時期（1978年～現在）

1978年12月に、歴史的な意義を持つ中国共産党の「十一回・三中全会」が北京で開催された。同大会では、中国は改革開放政策を実施することに承認し、更に、共産党は「左」思潮による弊害をすべて改め、共産党の民族政策を再度貫徹した。

この時期のモンゴル語は、モンゴル民族教育の新たな発展期を迎えており、九年の義務教育が普及するとともに、高校教育と職業教育及び幼児教育などの教育機関が設置された。こうして、幼稚園から高校までのモンゴル族教育モデルが成立した。

改革開放以来のモンゴル語は、モンゴル民族教育の質が次第に向上し、モンゴル族の優秀な双語人材を国内の各地域の大学に進学させ、中国の特色である社会主義事業を開始するため、実用性の高い人材を多く育成した。

### （1）小学校教育モデル

この時期のモンゴル語では、モンゴル民族の教育でも、モンゴル語教育だけではなく、漢語教育を導入し、さらに、蒙漢双語を融和させる時期になった。

#### ① モンゴル語で授業を行う教育モデル

改革開放以前のモンゴル語教育は、社会の変遷にともなって、様々な課題に直面することとなった。改革開放以降の国内社会は、ほぼ安定状態となり、国家教育部と遼西省の各教育に関わる機関は、少数民族の教育に重きを置き、民族教育は発展の時期を迎えた。

<sup>45</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年 p54

1981年には、中国全国「第三回・少数民族教育工作大会」が開催され、同大会にて、「民族の教育工作を最も強化させる」公文書によって、「少数民族では、本民族の言語文字を持っている民族は、すべての小中学校の授業は、本民族の言語文字を主として学ぶつつ、合わせて漢語も学ぶ」ことが提案された。また、遼寧省では、中央政府からの提案を実施するため、全省の民族教育・民族語文工作大会を開催し、同大会にて「遼寧省民族教育・民族語文工作大会の会議紀要の通達書」（遼政発『1982』53号公文書）を配布した。さらに、省内のモンゴル族と朝鮮族は、本民族の言語で授業を行うことを強化しなければならない旨が述べられた。

1982～1985年に、県政府は、仏寺公社の4つのモンゴル小学校でモンゴル語の授業をするモデルケースを実行し、次第に拡大された。同年には、85名の生徒を募集した。さらに、県教育局、県民族事務委員会、県モンゴル語文工作委員会（略称：蒙語辨と呼ぶ）は、モンゴル語で授業することへの研究会を開催した。同会議の参加者は、モンゴルジン地域でモンゴル語による授業が実施可能であるという信念を持っていたため、モンゴル語教育は重要視されることになった。

モンゴル語教育の質を向上させるため、1986年6月に、県委員会常務委員会の拡大大会が開催され、同会議において、モンゴルジン全域にあるすべてのモンゴル族学校で、モンゴル語教育とモンゴル語での授業実施に関する提案が承認された。

県委員会は、「我がモンゴルジン地域のモンゴル語教育の現状に合わせて、モンゴル語で授業が行われる条件を作る、モンゴル語で授業を行う学校及びクラスの規模を拡大する、幼稚園から高校までモンゴル語で授業が行われる民族教育システムを作り上げ、蒙漢兼通の人材を育成する」という方針を示した。

上記の提案は、1988年に承認された「阜新モンゴル族自治県・自治条例」と、1989年に承認された「阜新モンゴル族自治県・モンゴル語文工作条例」に記載され、モンゴル語教育の円滑な実施が保障されることになった<sup>46</sup>。

## ② 漢語で授業を行う教育モデル

改革開放以来のモンゴルジンは、外部との交流が次第に盛んになり、使用可能な言語がモンゴル語のみであることは、発展した社会のニーズに合わない状況になり、モンゴル語の学習に加えて漢語も必ず学習することになった。

1981年には、阜新モンゴル族自治県・教育局が阜新モンゴル族自治県・人民政府に「民族教育を整理、回復、発展させる」という報告書を提出した。同報告書は、モンゴルジン地域の主体民族である

<sup>46</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年 p78-80、147-156、209-232（モンゴル語版）

項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月 p275-282

項福生・王静「主編」『模范校长』东方财富出版社2012年 74-150（蒙漢双語版）



モンゴル民族のモンゴル語教育と民族小中学校（他は漢族）教育を優先的に発展させ、民族小中学校の教育の質を向上させることに言及した。さらに、以前撤廃されたモンゴル語科目をすべて回復し、75%以上のモンゴル族の生徒は、モンゴル語を学ぶことになった。

1987年、阜新市・教育局は「市内の学校に九年制義務教育を普及する計画書」と「九年制義務教育を普及する実施細則」を制定した。更に、阜新モンゴル族自治県が義務教育（モンゴル族の義務教育）を普及する際に、2つの段階に分けて行うことが定められた。第一に、初等（小学校）義務教育を普及する。第二に、中等（中学校）義務教育を普及する。当該の初等（小学校）義務教育を普及することは、「普九」のプロセスに直接的な影響を与えている。

### （2）中学校教育モデル

改革開放政策によって、1979年に、県教育局は遼寧省教育庁の会議における指示を貫徹するため、モンゴル族の中学校を回復し発展させるための教育計画を制定した。1984年には、県内で「モンゴル族中学校」1校が設立された。

1988年、県内で新たにモンゴル語による授業を行う完全中学校が1校設立され、同年に85名の生徒を募集し、2つのクラスに分けた。

しかしながら、1990年代の末期には、中央政府による学校の分布を調整する政策によって、大固本、東梁、大巴、富榮鎮などのモンゴル中学校が各郷鎮にある普通中学校と合併された。例外として、紅帽子モンゴル中学校は、紅帽子郷九年一貫制学校に変更された。

2005年のモンゴルジンは、モンゴル族高級中学校1校、30クラス、生徒1810人であった。モンゴル語で授業が行われている完全中学校1校、45クラス、学生2537人であった。また、モンゴル族中学校7校（モンゴル語クラスを設置しているモンゴル中学校3校を含む）、113クラス（7つのモンゴル語クラスを含む）、学生5225人（モンゴル語クラスの107人の学生を含む）であった。その他、普通の中学校にいるモンゴル族生徒は2015人であった<sup>47</sup>。

### （3）モンゴル医薬クラス教育モデル

モンゴル医薬学は、中華医学の重要な構成部分であり、民族繁栄のために不滅の貢献をした。モンゴル医学は、中国の医学典籍にとっても重要であり、さらに、中華医学と同等の価値がある。モンゴルジンのモンゴル医薬学は、チベット仏教と医薬学の基本理論を輸入し、投薬法、採集加工、作り方と臨床治療効果などの技法を吸収した上で、現在の特別なモンゴルジンモンゴル医薬学になった。

新中国が成立して以降、モンゴル医薬学中等専門学校と高等専門学校は運営が停止されなかったため、当時のモンゴル医薬学を伝承する人がいないという問題は解消された。特に、1978年に中国共産

<sup>47</sup> 常德福・陶志「主編」『阜新蒙古族自治县蒙古族教育簡史』辽宁民族出版社2007年 p81-82

国家民委民族問題五種叢書・中国少数民族自治地方概況『阜新蒙古族自治县概況』民族出版社2009年 p126-130

党の「十一回・三中全会」が開催されて以来、市内の衛生学校と高等専門学校にモンゴル医薬学中等専門クラス、高等専門クラスが設置され、2つの学校はモンゴル医薬学の専門人材と看護師551人を育成した。また、中等専門学校の卒業生は435人、高等専門学校の卒業生は116人であった。これらの卒業生は、モンゴルジンモンゴル医薬学の発展のため、大きな貢献をした<sup>48</sup>。

### Ⅲ. まとめと今後の課題

本稿では、モンゴルジンモンゴル族教育の歴史を、特に言語教育を中心に素描を試みた。今後の課題として、以下の諸点の考察が残された。

モンゴルジン地域は、漢族に包囲されている雑居区のモンゴル族集居区のため、授業言語として、モンゴル語に加えて漢語を採用しなければならない。これが、双語教育が要請される理由であるが、現在までのこの政策は、必ずしも成功しているとは言い難い。実効性のある蒙漢双語教育政策とはどのようなものなのかが、改めて考察されなければならない。

モンゴル族の教育史の学習は、現在の蒙漢双語教育に現れている問題にどのような貢献をなすことができるのか。筆者自身、八省区のモンゴル族教育史を学ぶことを通じて、モンゴルジンモンゴル族に適合する民族教育政策を考察することを今後の検討課題としたい。

---

<sup>48</sup> 項福生「主編」『阜新蒙古族自治县民族志』辽宁民族出版社1991年6月 p295-303

暴风雨・項福生「主編」『蒙古贞历史』辽宁民族出版社2008年8月 p138-158

国家民委民族问题五种丛书・中国少数民族自治地方概况『阜新蒙古族自治县概况』民族出版社2009年 p160-166